

IDDNewsletter.....5

May

```
1  <html lang="ja">
2  <head>
3      <meta charset="UTF-8">
4      <meta http-equiv="X-UA-Compatible" content="
5      <meta name="viewport" content="width=device
6      <title>重複学級</title>
7  </head>
8  <body>
9      <div style="text-align: center; margin-top:
10     
12     <p style="text-align: center; font-size: 3
13     <a href="./zyuhuku_PDF.pdf">
16     
18     <div style="display: flex; justify-content:
19     <li style="margin: 10px; list-style: none;
20     <li style="margin: 10px; list-style: none;
```

特集

「もうひとつの世界」

令和5年度が始まりました。

今年度も、専攻科情報デザイン科では、生徒一人一人に合わせた活動内容と指導方法を準備しつつ、教育コンテンツにおいてデザインの本質を追求し続けていきます。

今年度、最初となる今号では、例年どおり、デザインの本質的な部分について改めて著させていただきたいと思います。

特集

「もうひとつの世界」

令和5年度が始まりました。

今年度も、専攻科情報デザイン科では、生徒一人一人に合わせた活動内容と指導方法を準備しつつ、教育コンテンツにおいてデザインの本質を追求し続けていきます。

今年度、最初となる今号では、例年どおり、デザインの本質的な部分について改めて著させていただきたいと思います。



先日、日曜日の午前中に放送される「ライオンのミライ☆モンスター」という番組を見ていたのですが、その中で吹奏楽の奏者の女子高生が紹介されていました。その学校は、全国レベルのコンテストで常に上位に入賞する強豪校です。

コンテストへの参加のための練習はもちろんなのですが、その女子高生の所属する高校では、定期的にそれぞれの部員の演奏を評価するコンテストが校内で行われるのだそうです。その校内の演奏会で審査をするのは、校内に籍を置く先生方ではなく、外部の一流の演奏家です。その校内コンテストで演奏した「モンスター」の彼女は、見事、優勝を獲得するわけです。

その演奏について、評価した審査員の先生は、このように言っていました。

「なんとも凛々しい…」

「人との関わり、つながりを感じさせる…」

大絶賛ですね。

しかし、よく考えてみたいと思います。確かに、このよ

うな芸術作品の評価、もしくは実演家（この場合「演奏家」の演奏の評価）というのは、非常に抽象的な言葉で語られることが多いと思います。感情の表出であったり、自分の体験との連想が主要要素となるのでしょうか。

このような感性的な分野の評価における「抽象的な語り」は、芸術分野における評価内容を語る言葉としては、実にありふれたものではありません。

しかし、例えば「凛々しい」ということ自体が、その演奏の中に含まれているわけではありません。音楽の演奏というのは、基本的には見えません。音というのは、基本的に波でしかありません。単なる空気の波動なわけですが、空気の波動以外の要素というのは何も含まれていません。その空気の波動の有り様が、ある規則性に基づいていたり、法則性に基づいていたりして、一定のルールをつくり、それをコントロールする。そのルールというものが芸術作品の価値として値する要素となっていくわけです。

そして、その法則性自体においても、例えば「厳しさ」でやったり、「人とのつながり」という要素を直接的に含

んでいるわけではありません。その人間が知覚できる現象から、その演奏を聞く立場、それぞれが持っている頭の中の構造に照らし合わせ、意味の階層構造を辿り、因果関係が見い出せた時、初めて背景にある現象とつながるわけです。

岡田^[1]は、次のように語ります。「…私達が日頃何気なく目にする風景も、注意してみればそこにはくもう一つの世界>が隠されていることが感得できる筈である。それは無限の広がりを持った想像の世界であり、目に見える世界の裏側に潜む精神的風景である。…（中略）…その背後に潜む世界こそ真の世界であるのかもしれない。可視的現象世界は、様々な寓意を信号として私達に送り続けている。これら無数のというべき信号を感受できるか否かは、私達の感受性の問題である」

この文の冒頭における「もう一つの世界」は、「無限の広がりをもった想像の世界」であり「目に見える世界の裏側に潜む精神的世界である」と説明されています。この「精神的世界」こそが価値あるものであり、目に見ることのできないこの価値は、現実世界で何らかの信号に変換され、私達の前に現れることになるわけです。そして、「可視的現象世界」に住む人間が受け取るその信号は、何らかの法則性と言い換えることもできるわけですが、それを読み取るために必要な力が「感（受）性」であると。

つまり、現象世界で可視化されているものは、その背後にある世界の「象徴」にすぎず、真に価値あるものはその背後にあり、その背後にある価値の比喩である、ということになります。

例えば、水たまりに風紋ができています。という状況を見たときに、それは「風紋ができています」と説明されるべきではなく、それが発生している根拠をたどっていき、「風が吹いている」という原因となる現象を提示するべきであって、そのことを読み取る力が求められるわけです。

芸術分野においてや、今、見えている（聞こえている）何かに驚いたり、びっくりしたり、感嘆したり…ということも非常に大事な要素です。それを美術の世界では「自律性」と呼んでいますし、現代美術などにおいては、非常に重要なテーマになるわけですが、その現代美術においてさえ、芸術の枠組みからは逃れられないわけです。本質的に芸術で行っていることというのは「メタファー」そのものであるはずで、メタファーを読み取り、目に見える現象を因果関係でたどって

いって、別な構造と比較しながら類似点を見つけたり、スーパークラスをたどっていったって本質的な何かを見出そうとしたり…といったことが芸術的な視点となるのでしょう。そこが伴わない「表面の見た目」への興味関心は、言語発達において最も初期の段階の鑑賞の手立てといっても過言ではありません。

情報デザイン科では、そのようなデザイン活動における心構え、鑑賞の有り様、物の見方、といったことについても特に重点的に扱っています。これが伴わない「ものづくり」というのは、結局クリエイティブとは言えません。創造性のないデザインは、単なる作業であり、それはデザインとはもはや言えません。

私たちは「手に職をつけなければ、一体何ができるんだ」という旧来の障がい者観からはどうにか抜け出しさなければならぬと切に願っています。そのための有り様として、目の前にあるものから背景を読み取っていく力が非常に大事になってきます。

「言葉には現実を生成する力がある」

その力を私たちは、学生たちにしっかり授け、クリエイティブな人材を排出し、微々たるものかもしれませんが、社会に何かしらの貢献をしていきたいと考えています。

今年度もどうぞ皆様よろしく願いいたします。

IDDN

参考文献

[1] 岡田敬司, “詩的風景芸術論序説：風景の奥に潜むものに就いての一考察”, 弘前大学教育学部紀要 (1993), 81-96.

Contents

特集

2-3 「もうひとつの世界」

令和5年度が始まりました。
今年度も、専攻科情報デザイン科では、生徒一人一人に合わせた活動内容と指導方法を準備しつつ、教育コンテンツにおいてデザインの本質を追求し続けていきます。
今年度、最初となる今号では、例年どおり、デザインの本質的な部分について改めて著させていただきます。

Welcome to Information Design Department!!

北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科学科だよりをお読みいただきまして、ありがとうございます。

令和5年度が始まりました。

今年度は、3名の学生を新たに迎えてスタートします。

昨年度とは、またずいぶん違った雰囲気ではありますが、これまで積み上げてきた歴史を継承し、新たな属性を加えつつ、新しい時代を拓いていかなければなりません。

今後とも、よりよい教育コンテンツと指導方法を提供するため、鋭意努力してまいります。

今年度もどうぞよろしくお願いいたします。



専攻科情報デザイン科の特徴

- ・高等学校に設置される「専攻科」と同様の枠組みです。(いわゆる「標準教育」の教育課程です)
- ・授業料が全くかからず、材料費等も非常に低コスト^(注3)で、対費用効果の高い学びができます。また、通学等に関わる費用は「就学奨励費」の対象^(注4)となっており、支援制度等も充実しています。
- ・DTPやWebに係わる「最新の」「スタンダード」な内容を重視します。(例えば、Webであれば、HTML5とCSS3を使い、セマンティックなコーディング、というように。もちろんテーブルレイアウトやcenterタグは使いません！)
- ・デザイン等に専門的な学習だけではなく、特別支援学校における「自立活動」^(注5)で扱うべき内容、例えば日本語教育や聴者社会の社会生活に係わる内容等を、総合的に、到達度がはっきり理解できるように学びます。
- ・学生のこれまでの学びの環境や積み重ね(「普通校」出身者か「聾学校」出身者か、失聴時期、日本語のリテラシー、学力等)に合わせた教育方法を準備します。
- ・筑波技術大学と協調した授業等も行っています。
- ・修了後について、本人、保護者の希望をお聞きすると同時に、ロールモデルとなる聴覚障がい教職員のアドバイスを受けたり、聴者社会とろう者社会、ろう者と難聴者との違い^(注6)などについて客観的に学びながら、単に「好きなこと」から「(社会にとって、自分にとって)やる価値のあること」「自分の技量でできること」「社会に貢献できること」といった観点から主体的に進路選択できるようにしていきます。

ファックス：0134-62-2663

電子メール：koutourou-z0@hokkaido-c.ed.jp

電話：0134-62-2624

※入試前で教育相談等に対応できます。

一人一人に合った指導方法を準備するために、できるだけ入試前に教育相談にお越しになることをおすすめいたします。

情報デザイン科学科だより

Information Design Department

IDDNewsletter

May 2023 5

IDDNewsletter

May 2023

発行人／北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」編集チーム

発行／北海道高等聾学校

〒041-0261 北海道小樽市銭函1丁目5-1

www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp

※ご意見、ご要望などにつきましては、上記 Web ページより電子メールでご連絡ください。